



DIABLO
闇と光の代償

短編小説 作：
JONATHAN MABERRY

ストーリー
JONATHAN MABERRY

編集
ERIC GERON

ロア・コンサルテーション
IAN LANDA-BEAVERS

クリエイティブ・コンサルテーション
LEWIS HARRIS, VIVIANE
KOSTY, JOE SHELY, DANIEL
TANGUAY

制作
BRIANNE MESSINA

デザイン
COREY PETERSCHMIDT

イラスト
YEUNJAE JANG

BLIZZARD
ENTERTAINMENT

© 2023 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardおよびBlizzard Entertainmentのロゴは、
米国およびその他の国におけるBlizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

闇と光の代償



彼には多くの物語が存在する。だが、「黄金の者」と呼ばれたクラス＝ウルナは、そのあらゆる物語で、邪魔する者すべての深紅の血を浴びている。

私、テジャルは、夢の中で彼を見てきた。シャーバル荒野から、セント・コーリングの小さな街まで——彼はやってきた。

もしその場所について聞いたことがなければ、明るい火を起こし、扉に鍵をかけ、耳を澄ましながら、これから語る物語に耳を傾けよ。こうして語っているうちにも、あの町で最も高い位置にある鐘楼に掛けられた、聖なる鐘の音が聞こえてくる。かつてクラストから運ばれたあの鐘の存在を人々は喜んだ。

なぜなら彼らにとって、それは光に祝福された鐘だったからである。しかし、賢明な人々は知っている。タリスマンが盾になることなど滅多にないと。むしろ、それは希望の象徴である。信仰と現実の隙間に、我々の物

語は揺らめいている。これから話すのは——クラス＝ウルナが召喚に応えてやってきた時、一体何が起こったのかを告げる——暗い真実である…



「それがあんたの本気か？」

その若者は足を大股に開き、体重を足の付け根に移動させ、膝を曲げて弾むように立っていた。片手に幅広のショートソードを持ち、もう一方の手と手首に小さなバックラーを縛り付けている。汗がむき出しになった胸や肩で光り輝き、顔の表面をしたたり落ちる。

「ウォーピッグはもっと凶暴だと思ってたぜ」若者は挑発的に言った。

「さあ、俺を倒してみるがいい。あんたに地獄を見せて——」

「ウォーピッグ？」老人がトレーニングホイールの取っ手にもたれかかりながら言った。「今回ばかりは聞き流せぬぞ、ジェンクス。ウォーピッグだって？一体、ウォーピッグとは何のことだ？ウォートホッグのことか？この近くには棲んでないはずだが」

「勘弁してくれよ、バイクルマン。もっと真剣にやってくれないか？」ジェンクスは背筋を伸ばした。「ウォーピッグさ！昔の詩に出てくるじゃないか。聞いたことないのか？」

「だからそのウォーピッグってのは何だ？手斧を持った豚か？剣を持った雌豚か？」

「奴らは悪魔さ——」

「またか」バイクルマンは突然口を挟んだ。「そんな話は聞きたくない。もう作り話を信じる歳でもなろうに。それに、悪魔などいなくとも、この現実世界には怪物が十分に存在しておる。

「でも——」

「口答えはよしなさい」バイクルマンはうなり声を上げた。「悪魔が異国の地を歩いたのは遠い昔のことだ。悪魔の話ばかりしていると、実際に奴らが呼び起こされかねん！お前さんは、いつか戦うことになる現実の相手に意識を集中しなくちゃならん」

「その相手って何のことだよ？人間か？そんなの退屈すぎる」

「退屈？退屈というか？」老人は呆れた表情で、首を左右に振りながら

大声で怒鳴った。「お前さんは皆に話しておったな。パラディンになりたい、光の兵士になりたい、ザカラムの英雄になりたいと。子供の頃こそ病弱で訓練には参加できなかったが、大きくなって体格もよくなったことだし、真剣に取り組む姿勢くらいは見せてくれると期待していたのだが…いいか、ジェクス。これは重要な訓練だ。兵士や山賊、盗賊や追い剥ぎと戦うための訓練なのだ。奴らこそが本当の脅威にほかならぬ。奴らが町を襲ってきた時のために、お前さんは準備をしておかなくちゃならぬ。それとも、お前さんはそんなことも出来ぬのか？」

まだ17歳で、これまで町から「渡し守の小川」より遠くへ行ったことがなかったジェクスは、頬が赤くなるのを感じた。「俺は真剣さ」

「ならば、それを行動で示してみるのだ。空想上の悪魔や、おとぎ話中の悪魔は、ただの気晴らしにすぎぬ。歴史の本を読めば、お前さんも納得するはずだ。パラディンは実際の、現実的でなければならぬ。お前さんが必要としている知識は、神聖なる学術書に書かれておる。そのような本は読んだこともなかるう」

「あるさ…学術書くらい」ジェクスは言い訳がましく答え、小さな声でこう続けた。「ちゃんとじゃないけど」

「ほれ見たことか」老人は突然、トレーニングホイールを前に押し出した。たくさんの木製のアームが驚くべき速さで回転した。

不意を突かれたジェクスは、しゃがみこんで頭上の巨大なアームを避けると、カエルのように飛び上がって足元の一撃も回避した。少年は地面で一回転して立ち上がったが、今度は腹部に向けられた強烈なパンチが迫っていた。しかし、ジェクスはまるで踊り子のように体を後ろに反らし、その一撃も見事に回避してみせる。刃のついた小さなアームは、他のどのアームよりも速く回転していた。ジェクスはバックラーでそれを牽制しつつ、相手の心臓の部分を一すなわち藁が詰められたキャンバス生地のパッドを——刺し貫いた。切れ味の悪い木刀はしっかりと命中し、一瞬にしてジェクスの顔には勝利の笑みが浮かび上がった。

「どうだ！ウォーピッグの悪魔を倒したぞ」

バイクルマンは車輪を固定している棒を蹴り上げると、そのパッドの入った先端がジェクスの股間を直撃した。ジェクスは口笛のような高い悲鳴を上げて膝をつき、剣を地面の上に落とした。前傾姿勢になった少年は、肌の色が紫色に変わり、そのまま横に倒れてしまう。

老人は足を引きずりながら、彼の傍に立ち、ニヤリと笑って見下ろした。「ウォーピッグはズいぶん厄介な獣だとは思わないか、若者よ？」

ジェンクスは老人に向かって叫ぼうとした。地獄の底まで呪おうとした。全然痛くないと意地を張ろうとした。無傷である証拠に立ち上がろうとした。

しかし、少年はそのすべてに失敗した。

バイクルマンは振り向くと、驚くべき速さで下に向かって唾を吐き、心臓のパッドの中心部分を正確に捉えた。

「なかなかよいセッションだったぞ、ジェンクス。明日はハリネズミの悪魔と戦う方法をご教示いただけるかな？」

ジェンクスは寝返りを打ち、嘔吐した。

老人はしばらく彼を見下ろした。「お前さんはいい子だ、ジェンクス。だが、もっと成長しなければならん。わしも今でこそ老いぼれに見えるかもしれないが、お前さんもよく知っておるように、かつてはパラディンだった男だ。お前さんが生まれるずっと前のことだが、敵の兵士と剣を交えるあの感覚は今でも、筋肉、骨、心臓、精神に至るまで全身のあらゆるところで覚えておる。相手は怪物などではなく、あらゆる殺しの訓練を受けた戦士だった。よいか、少年。この世で一番恐ろしい存在は、技、鎧、武器、心を持ち、その剣で敵の血を求める戦士にほかならぬ。わしも、ラッキスの聖戦が始まった頃から、鋼鉄のぶつかり合いや死にゆく者の叫びを夢に見ない夜はない。姉妹や兄弟、友人たちの血に足首まで浸かって立ち尽くすしかないのだ」老人は頭を横に振った。「戦いの欲望に駆られた人間は、十分立派な怪物だ。悪魔を空想する必要などない」

そう言いながらも、口元には優しげな笑みが浮かんでいた。「夕食の時にまた会おう」

老人は振り返り、足を引きずるようにして町へ戻っていった。かつて戦友たちと歌った戦いの賛歌を口笛で歌いながら。



やがてジェンクスは一度立ち上がったが、再びトレーニングホイールの中央柱に背を向けて腰を下ろした。激痛が収まると、彼は痛みを集中さ

少年は素早く、軽快で、剣や槍や弓の扱いに長けていた。 ただし、戦うべき相手はもういない。

せて、苦痛や苦悩をそのままの形で受け入れた。少年はそれを、戦士として成長するための代償の一部として受け止めざるを得なかった。

バイクルマンが足を引きずるのは、かつて槍で腰を貫かれたからだった。鍛冶屋のレッドハーンには、剣や矢で受けた傷跡が6つもあった。その他にも大勢の負傷者がいて、老人たちの半分は、かつて神聖な大義をもって戦場に赴いた兵士たちだった。彼らはレッドハーンと同じように、戦いで負った傷跡を身にまとい、冬の夜には友人たちに武勇伝や戦争の話をよく聞かせていた。

一方、町の若い戦士たちはというと...

まるごと聖戦から帰還していない世代もあった。ジェンクスの脳裏には、血を流しながら戦い続け、痛みに耐え、勇敢に倒れた彼らの姿が浮かんでいた。全員が英雄だったと、彼は強く信じていた。

しかしそれはあくまでも憶測に過ぎず、町の人々の年齢には大きな隔りがあった。なにせ、バイクルマンよりほんの少し若い者から、ジェンクスより辛うじて年上の者まで、あらゆる世代が聖戦に参戦したのだ。その全員が亡くなり、誰一人として生還することはできなかった。学校や町を離れ、従者や槍兵、弓兵の見習いとして旅立った若者たちさえも。

皆、消えた。

皆、死んだ。

悲しいことに、彼らの物語は語られぬままだ。確かに、彼らの詩は教会でも歌われていた。しかし、ジェンクスはそれが、彼の空想するウォーホッグやゴブリンと同じように、偽りの物語であることを知っていた。教会で信徒たちが歌っていたのは、失われた人々の家族や友人によって書かれたバラッドだった。その勇ましき歌は、人々の心を楽しませ、喪失感を癒していた。

彼らと同じ運命を辿る可能性があったことは、ジェンクス自身も理解していた。しかし、少年時代の彼は病弱であり、病気という自身との戦いを乗り越えた時には、戦いは既に終わってしまっていた。

17歳になった今、ジェンクスは戦争に飢えていた。彼はもう病気ではない。毎週、毎月、果てしなく訓練が彼を強くしていった。少年は素早く、軽快で、剣や槍や弓の扱いに長けていた。

ただし、戦うべき相手はもういない。

彼はその場に座ったまま、真の戦士になる機会を求めた。愛する人々と残酷な悪の狭間に身を置くことこそが、彼の長年抱いてきた最大の夢だった。しかし、どれだけ訓練に励んでも、それが無益な行為であることを彼は自覚していた。

「かつての戦争は終わったが、また次がやってくるかもしれない…」と彼は自らに向かって呟いた。

叫び声が聞こえ始めたのは、ちょうどその時だった。



町のはずれで、男が佇んでいた。ジェンクスは、納屋の後ろの角にしゃがみこんで見つめた。

その男を。

それはジェンクスが初めて見る類の男だった。ビッグ・ゴーフよりも背が高く、鍛冶屋のレッドハーンよりも遅しい。まるで古代の伝説から飛び出してきたかのような男で、巨大な肩、厚い胸、大きな腕、そして冬のような冷たさを放つ黒い目を有していた。その姿は死の博物館にある彫像を思わせ、身に纏うその完璧な鎧には見慣れた金属と奇妙な金属が混ざり合っている。そのほとんどは本物の金で塗装されていたが、幾多の戦いで傷ついているようだった。自身の肩よりも広い肩当てには、それぞれに尖った棘が生えている。同じような棘は肘や、バックラー、脛あて、そして重厚なブーツにも生えていた。鎧に描かれているのは、頭蓋骨や骨といった死を意味するシンボルだ。胸に刻まれているのはザカルムのシンボルだろうか？ わずかに見える太い首筋や、はげ上がった頭には、荒々しくて、醜く、不気味な刺青が刻まれている。

そして、男の武器。

とても見世物用の武器には見えない、平凡な柄のナイフだ。そして、片方の屈強な肩には、実戦で使うにはあまりにも巨大で、重そうなメイスが



掛けられている。本体は聖なる鐘のような形をしているが、鐘の口があるべき場所には短剣のような鋭い棘が連なっていて、吊り輪からは2本の曲がった爪のような棘が外側に突き出ている。長い柄の先についているのは鉄球だ。男がその巨大な武器を持っていることだけで、どこか恐怖を感じさせるものがあった。恐ろしい出来事が約束されていた。

見知らぬ男、すなわちその戦士は、町の大通りを見下ろした。男は少しの間、荷車の陰やカーテンの隙間、半開きの戸口に隠れる人々の顔を眺めた。荒地から来たバーバリアンだと囁く者もいれば、暗黒の魔法を行使しに来たドルイドだと主張する者もいた。いずれにせよ、人々は空中で守護の印を描き、神聖な祈りの言葉を呟いた。

それから男の暗い視線は、セイント・コーリングで唯一存在する教会の高い鐘楼に向けられた。ザカルム教会の鐘はこの町の歴史よりも古く、東部で鑄造された鐘が聖戦の時代に西へ持ち込まれたものだった。鐘の周りに信者の町ができることを期待して、各地の駐屯地に同じような鐘が残されていたという話である。セイント・コーリングの鐘もその一つだった。それまでその哀れな町の塔には古い鐘が取り付けられていたが、新しい鐘のおかげで住民は皆、信仰心で豊かになることができたという。午後の太陽の光を受けた塔は、道の中央に沿って、見知らぬ男の鋼鉄製のブーツまで届く影を落としていた。

男はゆっくり跪くと、指でその影に触れて、しばし目を閉じた。男が深呼吸で息を吐き出し、一人で頷く姿をジェンクスは見た。やがて

戦士は立ち上がり、周囲を見回した。

「セイント・コーリングの人々よ」と男は雷鳴のごとく深淵な声で言った。私は〈熊の一族〉のクラス=ウルナである。私の民はバル=カソスの子であり、私は黄金の戦士と呼ばれている」

男の言葉は建物から建物へと反響し、窓をガタガタと震わせ、木々の鳥たちを怖がらせていた。

「重要な探し物がある。この塔にある鉄の鐘のことだ。それを渡してくれば、私はここを去る。誰にも危害を加えるつもりはない。ただし、拒否するか、邪魔をすれば、ここに住むすべての人々を破滅させる。男も女も、最後の赤ん坊に至るまで、徹底的に。約束しよう」

そう言って男はメイスの柄に手を伸ばすと、それを振り降ろし、棘のある鐘の頭の部分を塔の影に強く叩きつけた。大地そのものを揺るがすような衝撃が走り、地面にはそこから亀裂が広がった。ジェンクスは、見守る群衆から息を呑む声、そして悲鳴を押し殺すような音さえ聞いた。

やがて息を呑む音が、静寂に変わる。誰も動こうとせず、このバーバリアンのために鐘を取りに行こうとする者は一人もいない。この状況は、ジェンクスに勇気を与えた。町全体が団結すれば、この男を倒せるかもしれないと感じたのだ。

バーバリアンが一人一人の顔を見つめていくと、その場所に静寂が広がった。男は怒りと嫌悪が入り混じったような声で喉を鳴らした。

「なら私が取りに行くまでだ」と男は言って、鐘楼の影に脅威の一步を踏み入れ、周囲をちらりと見渡した。「私に立ち向かう勇者はいないのか？せめて町の誇りを見せてくれるような、勇敢な戦士が一人くらいいないのか？」

男は片手にメイスを軽く握りしめたまま、そこに佇んでいた。

沈黙が唯一の答えだった。

ジェンクスは見た。はじめは下がっていた男の口角が、暗い喜びに満たされて徐々に上向きになっていくところを。

「予想通りだ」男はバトルメイスを持ち上げながら言った。「私は残念でならない。この地には誇りが失われている。勇者さえいないとは、何とも哀れなことだ。私が去った後、貴様たちは何を語る？いかなる嘘で誇りを取り戻す？旅人にどんな話を聞かせるというのだ？」

誰も自分の家や店から出ようとせず、挑発しようとする者も、鐘を取り

「貴様がこの町で最強の戦士か？」 クラス=ウルナは尋ねた。

に行こうとする者もいなかった。この状態が延々と続いていた。

クラス=ウルナは地面に唾を吐いた。

ジェンクスは驚いたカラスのような鋭い叫び声をあげ、後ろによるめき、体の向きを変えて走り去っていった。

クラス=ウルナは視線を感じながらも、決して周囲を見ようとはしなかった。囁き声や罵声、祈りの声が想像できた。ここの住民も他の町と同じだった。

今までいくつの町に訪れたのか、男は思い出すことができなかった。いくつかの町はそのまま残されたが、多くは灰と化し、地面が血に染まり、死体は埋葬されずに放置され、死肉喰らいの餌食となった。町の名前は忘れ去られ、死者たちの名前も知られることはなかった。彼らのことなど、男にとっては意味をなさなかったのだ。

この町も同じ運命を辿るだろう。

教会が頭上にそびえ立っている。男は鐘に呼ばれているのを感じた。鐘は見つけられることを求めている。

その時、巨大なオークの扉の濃い影から一人の人間が現れた。その手に握られた明るい鋼鉄からは、陽光の破片が輝いている。

クラス=ウルナは教会の階段下でゆっくり足を止めた。

男にとっては想定内だった。以前にも同じようなことはあったからだ。偉大な勇者を持たない町の人々は、錆びた剣や投石器、鎌を手取る。しかし、この町は違った。そこには、大人ではなく、16歳か17歳くらいの少年が階段の上に立っていた。傷だらけの古い兜をかぶり、錆びた鎖帷子のシャツを着て、ぎこちない脛当てをつけ、極めて小さなバックラーを持っていた。

そして剣。

男は少年の剣に目を留めた。剣は立派なものに見える。本物のバトルソードだ。他の装備と違って、その剣はよく手入れされ、切れ味もよく、油も塗られていた。しかし、その刃には使用された跡がなく、傷もへこみもない。ならば新しい剣か、と男は思った。まだ誰にも使われておらず、汚れてもいない剣が、少年の手元にあった。

「貴様がこの町で最強の戦士か？」クラス=ウルナは尋ねた。



ジェンクスは慌てて鎧を身につけながら、頭の中で自分が言うべきことを繰り返していたが、いざ声に出そうとすると、言葉が詰まってしまい、無意味な呟きとなった。彼は強く飲み込んで、もう一度試みた。

「俺の名はジェンクス・グリンデルソン、セイント・コーリングの守護者だ。この教会に入ることは許さない。町の神聖な鐘も渡すつもりはない。今すぐ出て行け。そうすれば、危害は加えない」

クラス=ウルナは少年を3秒間じっと見つめると、やがて腹を抱えて笑い出した。それは全世界を震撼させるような笑いだった。

ジェンクスの額には、恐怖で冷たく脂ぎった汗が浮き出ている。その汗がシャツの下の背中に冷たく流れていくのを彼は感じた。手は汗でびしょびしょになり、何度も握り直さなければならないほどだった。少年は、心の中の恐怖が顔に出ないように祈った。

「少年よ、この印が何だか分かるか？」クラス=ウルナは首筋にある刺青を指して言った。

ジェンクスには答える勇気がなかった。

「この刺青には、この鐘のような宝物を探す私の歴史が刻まれている。それぞれが町の物語を語っているのだ。かつてザカルムの町は信心深い人々で溢れていた。信仰による救済を信じる人々で満ちていた」男は小さな一歩を踏み出した。「しかし、それらの町は、灰と化した。暗闇から身を守ろうとした信者たちは、焼けた家の中で黒焦げの骨と化した。光は彼らを守ることができなかったのだ」

男が立っている石段は、ジェンクスの足元で傾いているように見えた。

「中には、セイント・コーリングの5倍の規模の町や、聖戦で鍛えられた戦士が大勢いる町もあった。私は彼らに鎧を着せ、神父の祝福を受けさせた。祝福を受けた槍や祈りが刻まれた剣で、彼らは私に立ち向かった。だが少年よ、それは何の意味も成さなかった。なぜなら、私は黄金のクラス=ウルナだからだ。彼らは真の戦士たちだったが、私は彼らを皆殺しにした」

男は近づいてきて、一番下の段に片足を乗せた。

「それで、貴様は何者だ？戦争の経験がないだけならまだしも、自分の尻を拭くことも覚えてないような子どもではないか。鎧も粗末な上、剣はまだ血に染まってないときた」男は首を横に振り、話を続けた。「この町の誰一人として私に歯向かおうともしないどころか、顔を出す勇氣もない。しかし...少年よ...貴様に勝ち目はなし。私はこれまで幾多の戦場を歩いてきた。血の川を渡り歩いてきたのだ。この刺青を見ても、私が破壊した町や、殺した者の数を思い出すことは不可能に近い。それでも...貴様の精神は尊敬に値する。若者よ、私にいい考えがある。貴様の中に芽生えようとしている勇氣を称えてやろう。」

バーバリアンは説明もせず、メイスを壁に立て掛け、ジェンクスを見つめたまま、重い胸当ての紐を外した。鎧はそのまま落下したが、男は爬虫類のような素早さでそれを受け止め、地面に下ろすと、棘のついた腕甲や脛当ても外し、綿のアンダーシャツも脱いだ。今や革のズボンと靴、そして荒々しく体に散りばめられた刺青だけを身に着けて佇んでいる。

「これで戦いはフェアだ。貴様にもチャンスがある。だが、少年よ...最後にもう一度忠告するぞ。黙って鐘を渡せば、命は助けてやる」男はメイスを手を取った。鎧を脱ぐと、なぜかさらにより一層恐ろしく見えた。「そこをどけ」

「い...いやだ」とジェンクスは弱々しく言った。「鐘は俺たちの光を結びつけてくれる。鐘の音は闇を遠ざけてくれる。鐘はこの町の心臓なんだ」

戦争に駆り出された家族の顔が——両親や、叔父、叔母、従兄弟たちの顔が——ジェンクスの脳裏に浮かんできた。少年の危機とバーバリアンの脅威が彼らを呼び起こし、まるで彼らが彼と一緒にいるかのようだった。ジェンクスは肩に父の手を感じ、頬に母のキスを感じた。確かにその手や唇は冷たく感じられたが、ジェンクスの心はそれ以上に冷たく、冷静だっ

男はバトルメイスを振り上げ、ジェンクスの頭に振り下ろした。

重さ100キロはあろうかというその武器を、クラス=ウルナはまるで柳の杖のように振るった。

た。

誰か助けてくれ、と彼は心の中で願った。アカラットよ、我が剣の手を導き給え。速さと知恵を授け給え。

バーバリアンは少年の目の前に立ちはだかった。その存在は、世界中のあらゆる恐怖や憎しみと同じぐらい、圧倒的なものだった。

ジェンクスは頭を振った。「お前に鐘は渡さない。絶対に」

「貴様はそうせざるを得ない。貴様に私を止めることなどできないからだ。いや、こう言ってもよい。貴様は何一つ成し遂げることができない、と。ここで起こることは何一つ語り継がれない。バラードも、詩も、何も残らない。ただ、時の無情な風に運ばれる塵が残るのみだ」

ジェンクスは泣きたかった。叫びたかった。逃げ出して、隠れたかった。

それでも、精一杯の力を振り絞って、その戦いを知らぬ剣を、血を味わったことのない刃を振り上げた。

「鐘は渡さない。もしこの鐘を奪おうとするなら、このセイント・コーリングのジェンクス・グリンデルソンがお前を殺す。約束しよう」



クラス=ウルナはため息をついた。

本当はその若者を殺したくなどなかったのだ。それは無意味な戦いを避けたいからであり、そこに同情はなかった。この少年は男にとって無価値な存在だった。この臆病者ばかりの町で、まだ髭も生えていないような若者を殺しても名声は得られない。

男はバトルメイスを掲げ、ジェンクスにそれを見せた。その重い武器にはルーン文字が刻まれている。その一文字一文字は、ザカルムにある別の塔から奪った鐘の黄金で刻印されていた。

「生きるチャンスは与えたぞ、少年。だが、そこまで死を欲しているなら、貴様の望み通りにしてやろう」

しかし、先に手を出したのはジェンクスだった。



ジェンクスはチャンスが奇襲にしかないことを知っていたのだ。彼は剣を頭の上で円を描くように振ると、階段を下りながら、剣を振り下ろした。自分の体重、剣の重み、そしてあらゆる恐怖心をその一撃に込めた。

クラス=ウルナは、むき出しの胸部に迫る剣を、驚くべき速さで避けたが、それでもジェンクスの剣先は、男の鎖骨から肋骨にかけて赤い血の線を描いた。血が噴き出し、教会の影で暗赤色に染まった。

ジェンクスは立ちすくむどころか、前方に飛び出し、何度も何度も相手を斬りつけた。バーバリアンが態勢を立て直すことだけは避けねばならず、一刻も早く決着をつけたかったのだ。

クラス=ウルナは2撃目をかわし、3撃目は握りしめた拳で跳ね返した。

「なかなか速いではないか、少年よ」男は笑い、明らかに感銘を受けた様子だった。「貴様には度胸がある。貴様は、他の多くの優れた者たちが流すことのできなかつた血を流しながら死ぬことができる」

男はバトルメイスを振り上げ、ジェンクスの頭に振り下ろした。

重さ100キロはあろうかというその武器を、クラス=ウルナはまるで柳の杖のように振った。ジェンクスは叫び、身をかがめた。巨大なバトルメイスが彼の頭上わずか数十センチのところで空気を切り裂き、教会の正面扉に直撃して、それを木っ端微塵に粉碎した。破片が矢のように飛び散った。ジェンクスは至る所で痛みを感じ、やがて熱い血が流れているのが分かった。

クラス=ウルナが再びメイスを腰の高さで振ると、ジェンクスはカエルのように身をかがめ、剣先を前に突き出しながら飛び上がった。

少年は胸にくらったパンチが全く見えなかった。自分がドアの破片と一緒に後方に飛んでいったということだけは、なんとか理解できた。塔の内部の床に叩き付けられ、十数メートルは滑っただろうか。剣は手に残っていたが、胸全体が押しつぶされたような感じがした。体を回して、四つん

這いになると、彼は自分がまだ生きていることに愕然とした。

背後では、再び振るわれたバトルメイスによって扉の残骸が吹き飛んでいた。クラス=ウルナが塔の内部に入り、武器を振り上げながら少年に向かって歩き出している。

バトルメイスが床に叩きつけられる中、ジェンクスは前方に飛び出し、体を回転させた。その衝撃でジェンクスは再び跳ね上げられ、横方向へ投げ飛ばされた。彼は教会の座席にぶつかり、まるでゲームのタイルのように、それを次々と倒していった。

「アカラット、我を助け給え」とジェンクスは叫びながら、立ち上がるうとした。通路を歩くクラス=ウルナの姿が見え、少年は体を回転させて走った。

塔に通じる扉は頑丈に出来ていて、重たいオークの木材の上に鉄が帯状に巻かれていた。ジェンクスはそれを背後から叩きつけ、施錠を解いた。内部には聖歌集の入った書架があり、彼はそれを扉に押し付けた。

少年は螺旋状になった階段を駆け上がりながら、途中の踊り場で立ち止まっては、家具を階段に押し倒していく。樽に半分残ったランプオイルを見つけると、床の滑りをよくするために、階段に垂らす。

下からは扉を叩く音が聞こえる。一度。二度。ついに木は碎け散り、鉄の板がねじれ、扉は内側に崩壊した。弾けたリベットが壁にぶつかって、甲高い金属音を立てた。

クラス=ウルナは内部に侵入し、上を見上げた。ほんの少しの間、男とジェンクスは目が合った。男はまだ微笑みを浮かべていたが、どこか様子が違う。少年の抵抗に感心したのだろうか？ジェンクスは心の中でそう思ったが、死んでしまっただけは何の慰めにもならない。

バーバリアンは焦ることなく、虚弱な防御を破壊しながら、階段を登っていった。ジェンクスは階段を駆け上がり続けたが、とうとうそれ以上走れなくなってしまふ。鐘はすぐそこにあった。鉄でできた、純粋なる、神聖な、鐘がそこにあった。

ジェンクスは片手をその鐘に置いた。彼の心は必死の祈りで満たされていた。

光よ、我に力を与え給え。アカラットよ、我と共に戦い給え。あなたの力が必要です。全力を尽くしていますが、一人じゃ勝てそうにありません。助けてください！

外では雲の切れ目を通じて、鐘楼から綺麗な日差しが降り注いでいる。その光は、彼の顔と体を金色に染め上げ、心を新たな勇気で満たした。ジェンクスは剣を握り直すと、それを頭上に掲げて太陽の光を反射させ、その尊い光の恵みを受けた。彼は腕に新たな力を感じた。

少年は鐘を見つめ、涙を流してこう叫んだ。「絶対に鐘は渡さない。俺の命にかけて誓う」

すると、背後から足音が聞こえてきた。

少年が振り向くと、クラス=ウルナが鐘楼の壇上に向かってきていた。

「なぜ鐘のために命をかける？」

「鐘のためだけじゃない」とジェンクスは反論した。「ここは俺の教会、俺の信仰の場所だ。光が俺を味方してくれる」

クラス=ウルナは武器を下ろし、首を横に振った。「貴様はこの世界の仕組みが分かってない、少年よ。自分では理解しているつもりかもしれないが、信仰と理解は別物だ。それこそがこの世界の欠陥にほかならない。貴様のように無垢な人間は、無意味な死を望む。光の中に立つことが自分の鎧になると思っている。この鐘を守ることが自分の運命だと信じている。お前は真実が見えていないのだ、セイント・コーリングのジェンクスよ。貴様には教えられたことしか見えていない。そして、それが貴様の鎧にひびを生じさせている。貴様のような信者とは数多く戦ってきたが故に、私にはそれが分かる。その時も光は奴らを助けなかった。今日も貴様を助けてはくれないだろう」

「嘘をつくな！俺は真実を知ってる。お前は悪の手先だ。俺にはアカラットがついている。この教会も、この鐘も、神様からの授かり物だ。お前がいくら嘘をついたって、その事実を変えることはできない」

「貴様の根性は気に入っているぞ、少年よ。本当だ。私は臆病な勇者や王たちと戦ったことがある。貴様は私が最初の戦争で会った友人たちを思い起こさせる。その友人たちも貴様のように度胸だけは凄かった。しかし残念ながら...度胸や、無垢な精神だけでは十分ではない。そんなもので、私の友人を救うことはできなかった。私は友人たちの死を嘆き、そして仇を討った。私はそのとき、この世界の残酷さとその偽りの信仰を肌で感じたのだ」

男はそこで一度間をおいた。「貴様を殺したくはない。だが、殺さなければならぬのだ。もう一度同じ提案をしよう。鐘を渡せば、貴様とこの



あらゆる物の陰に少年の目が あった。彼は自分の信念や目 的の重みを感じた。

町は救ってやる。貴様のその度胸で、友人や家族を救うことができるのだぞ。だが、私は鐘を手に入れなければならないのだ。さあ...そこをどけ」

ジェンクスは涙を流していたが、そんなことはどうでもよかった。少年はもう一度、剣を構えた。

「俺はセイント・コーリングのために命をかけると誓った。この鐘はこの町そのものだ。ここで命をかけなければ、町や教会の期待を裏切った存在として、皆の記憶に残ってしまう」少年はゆっくり、強く首を振って、こう続けた。「鐘を手に入れたいなら、俺を殺してからにしろ。簡単には渡さないぞ」

クラス＝ウルナは少年をじっと見つめた。「喋り方まで私の友人に似ている」

男の目には深い悲しみがあつた。ジェンクスは一瞬、この殺人鬼が降参し、振り向いて去っていくのではないかと思うほどだった。

しかし、彼の心の中には疑いが芽生え、それが魂の土壤に根付いているのが感じられた。

「お前は間違っている。光は純粋な正義だ」

暖かい光が少年の頬を照らし、すべてが鮮明になった。彼は剣を頭上に掲げ、祈りの言葉を叫んだ。

しかし、誰も彼を救おうとはしなかった。

重いため息をつきながら、クラス＝ウルナも武器を構えた。



クラス＝ウルナは通りに降り立った。思い出せないくらい久しぶりに、バトルメイスが重く感じられた。あるいは、失った友人の思い出が彼の心に重くのしかかったのかもしれない。そして、たった今自分が行ったことが。

メイスの棘が真紅に輝き、鐘楼が血の飛沫で染まっていた。少年は粘り強く死んだ。死を悟った後でも、最後まで必死に戦い抜いた。胸部は潰れ、片腕は折れ、頬の骨はすり減り、片目は見えず、もう片方の目は赤い膜に覆われながら、ジェンクスはそれでも戦い続けた。折れた歯でいっばいの口からは、光への折りとクラス＝ウルナへの呪いが叫ばれた。彼は瀕死の状態でも、パーバリアンと鐘との間に立ちはだかろうとした。

少年は剣を握ったまま死んだ。彼は倒れるその瞬間でさえ、折れた剣でクラス＝ウルナを突き刺そうとしていた。

セイント・コーリングの最後のパラディンが死んだ。クラス＝ウルナは少年の上に立って、少年の傷ついた胸部が上下に動くのを見ていたが…やがてついには鼓動が止まった。この無意味な戦闘に対する苛立ちを感じた男は、少年の手にある剣を蹴り飛ばしそうになった。

だが、途中で止めた。

その代わりに、パーバリアンはしばらくの間、警戒をするように立っていた。こんなことをするのは、はるか昔に友人が亡くなって以来初めてだった。かつての仲間の影が、ジェンクス・グリンデルソンの死体の中に見えた。

「馬鹿な真似を」と男はため息をついた。

そして、鐘を携えて去っていった。

男が再び鎧を身に着けて通りに出ると、広場には十数人の住人が集まっ
ていて、それぞれが何らかの武器を握りしめていた。しかし、人々が見ているのは鐘であり、ジェンクスではなかった。クラス＝ウルナは彼らの表情の変化を見て取った。怒りや悲しみ、恐怖や敗北が表れていた。

男は集団に向かって歩いた。人々が男の周りを囲み始める中、彼はただ一言「やめておけ」と言い放った。

ただその一言だけだった。

人々は涙を流しながら背を向けた。男はセイント・コーリングから立ち去った。

男はそれから半日ほど山の中を歩いて、自分の馬を繋いでいた場所で立ち止まり、鞍に吊り下げていた窯を取り出して火を焚いた。夜も更けてくると、ヤスリを使って鎧に目の穴と口の切れ目を入れ、それを実際に身につけた。町の人々にとっては鐘であったものが、男にとってはぴったりとはまる兜となった。そうでなければならなかった。この兜で男の着ている

鎧が完成したのだ。月明りの中で男はしばらく佇み、目を閉じたまま、両腕を大きく広げ、拳を握りしめた。

男は鎧一式を荷馬車から取り出し、それを身につけた。彼は兜の位置を整え、完成を実感し、これまで自分を駆り立ててきた誇りを感じる用意ができた。これは男が人生の長い年月を費やしてきた旅の最後の行為だった。

しかし、兜は男の上に重くのしかかる。あの少年、ジェンクスのことを考えると、男の誇りは憂鬱な感情に変わっていった。

少年は、光への信仰にひどく感わされていたにもかかわらず、純粋であり、真実であり、勇敢だった。

クラス＝ウルナはその純粋さが炎のように肌で燃え上がるのを感じた。あらゆる物の陰に少年の目があった。彼は自分の信念や目的の重みを感じた。

男は振り返って馬の方へ向かったが、その数歩の間に、鎧の破片が奇妙な音を鳴らし始めた。それはまるで、鎧の各部分が、鎧を作るために集めた鐘の音を響かせて、男に取り憑いているかのようだった。その音を聞いた男は、立ち止まって身体を震わせたくらいだった。

彼は馬の手綱を取り、馬に乗る前に来た道を——すなわちセント・コーリングに通じる道を——振り返った。

あの町には、他にも少年たちがいた。力をつけながら、純粋な信念を持つ少年たちがいた。この鎧が響かせている音は、彼らを戦争へと駆り立てる鐘になり得るのだろうか、と彼は考えた。彼らから鐘を奪ったことで、次世代のパラディンに新たな目的と強さを与えたのだろうか？彼らは彼を、あるいは彼のような者を探しにくるだろうか？

間違いない。

それが単なる思いつきではないと思うと、彼は悲しくなった。それは予言なのだ。

男はしばらくの間、目を閉じた。それから馬に乗ると、頭を回転させて、東へ向かって走り出した。

その場にいたわけではないが、私にはこの物語が見えた。私、テジャルは、そのような知識や洞察力に恵まれている。

あの戦いに真の勝者などいなかった。私と異なる意見を持つ者は、歴史の展開や人の心の動きを理解していないのだと思う。

クラス＝ウルナが勝ったわけではなく、ジェンクスという少年が負けたわけでもなかった。

ジェンクスは人々の間で伝説となった。死してなお勇敢に立ち向かったその姿を目撃した、セイント・コーリングの多くの若者は、カードやサイコロを捨てて剣を手にした。戦うこと、時には死ぬことにさえ、意味があるのだと、ジェンクスは若者たちに教えた。

その剣は今もなお、戦いの炎の中で鏡のように輝き、希望の力を与えられた右腕によって掲げられている。

クラス＝ウルナの物語には...続きがある。黄金の川が——そして血の川が——男を待っている。自らに背を向けた信仰の教会の鐘から鎧を作るという探求がようやく終わったにも関わらず、兜を手に入れ、鎧が完成した今、男は元の自分に返ることができるかと信じていた。彼自身にも分からない方法で、故郷に帰れるのだと信じていた。

しかし、彼のような者に故郷はない。これからも決して。戦争が男の名を呼ぶ。血は男の魂に歌いかける。征服は男の忠誠を要求する。男はこれからも多くの血を流すだろう。しかし、セイント・コーリングの後の男を知る者は...以後、彼がその後決して同じではなかったと囁いた。



JONATHAN MABERRYは*New York Times*のベストセラー作家であり、ブラム・ストーカー賞を5回、スクライプ賞を3回、インクポット賞を1回受賞している。また、彼はアンソロジー編集者、執筆教師、コミック作家、そして*Weird Tales*の編集者でもある。作品には、Joe Ledgerシリーズや、*Rot & Ruin*、*Kagen the Damned*、*Ink*、*X-Files*、*V-Wars*、*Glimpse*、*Black Panther*、*Captain America*、*Wolverine*、*Punisher*、*Bad Blood*、*The Wolfman*、*Mars One*などがある。International Association of Media Tie-In Writersの会長を務め、妻のサラと凶暴な小型犬のロージーとともにサンディエゴに住んでいる。



テジャルには語るべき物
語が多く存在します。今
後もヘダジの短編小説が
続々と公開予定です...